

2 調査期間 一九九一年（平3）九月～一〇月

3 発掘機関
中主町教育委員会

4 調査担当者 辻 広志

5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡

6 遺跡の年代 弥生時代前期～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

西河原森ノ内遺跡は、野洲川右岸下流域の沖積地（自然堤防帯）に位置する遺跡で、官衙状の建物群や、天武朝の文書木簡を始め、律



(近江八幡)

令期の多量の遺物が出土している。

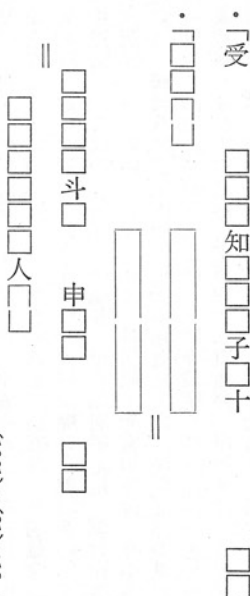
今回の第一三次調査は、資材置場建設に伴い五五六㎡を調査したもので、先の官衙状遺構群から約四〇〇m南に位置する。

調査地における検出遺構とその時期は、第一遺構面

が一二世紀、二〇世紀、第二遺構面が一〇世紀、一二世紀、第三遺構面が八世紀後半、一〇世紀初で、第四遺構面が七世紀後半、八世紀初頭である。第二遺構面からは野洲郡の統一条里型地割にほぼ等しい、六条八里三〇坪と七条八里二五坪の里界線にあたる大畦を、第三遺構面においては第二遺構面の下層に両岸に大畦をもつ里界線の溝を検出した。第四遺構面は、約一mもの洪水層の下にあり、上層とは全く異なる地割を示しており、幅三m以上、深さ一・七m以上の南北溝（運河か）、その西岸の大畦と水田を検出した。木簡はこの第四遺構面から出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 受 ☐ ☐ ☐ 知 ☐ ☐ ☐ 子 ☐ 十

(1061) $\times$ (31) $\times$ 13 019

木簡は、第四遺構面の大畦近くの水田面上にやや浮いた位置で、八片に折り捨てられた状態で発見された。現況は、上端が当初の面を残すものの、両側辺を削り落して幅を減じ二次的な加工を加えていると共に、下端を折損している。文字は、表裏に見られ、表と考

えられる面の上端には「受」の文字があり、物品等の収受に関わるものである可能性があるが、判然としない。今後の検討を待ちたい。

(辻 広志)

木簡研究 第八号

巻頭言——最後まで残る仕事——

青木和夫

一九八五年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京三条六坊七坪 平城京右京七条一坊十五坪 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京左京三条三坊十一町 平安京左京六条一坊八町 平安京左京九条三坊十四町 平安京右京八条二坊二町 平安京右京八条二坊五町 鳥羽離宮跡 伏見城跡 西ノ辻遺跡 観音寺遺跡 大飼堂廃寺 穂積遺跡 玉津田中遺跡 辻井遺跡 長尾沖田遺跡 但馬国府推定地 朝日西遺跡 大淵遺跡 沓掛城跡 勝間田城跡 神明原・元宮川遺跡 今小路周辺遺跡 鶴岡八幡宮境内研修道場用地遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 西河原森ノ内遺跡 勸学院遺跡 金剛寺城跡 柿堂遺跡 法界寺跡 今泉城跡 富沢水田遺跡 中尊寺伝三重池跡 胆沢城跡 浪岡城跡 俵田遺跡 秋田城跡 九十九橋 一乗谷朝倉氏遺跡 三木だいもん遺跡 弓庄城跡 番場遺跡 小島西遺跡 富田城跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 備後国府跡 秋月遺跡 大宰府跡 大宰府条坊跡 豊前国府跡 如法寺遺跡

一九七七年以前出土の木簡(八)

平城宮跡(第一次・第二次・第三次・第四次・第四次一次・第四次三次)

唐招提寺講堂地下遺構

中国簡牘研究の新動向

中国簡牘研究の新しい動向

倉札・札家考

柚井遺跡出土木簡の再検討

出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面

——草戸千軒町遺跡を中心に——

衆報

李 学 勤
訳・菅谷文則
原 秀三郎
柴原永遠男
志田原重人

頒価 三八〇〇円 千五〇〇円